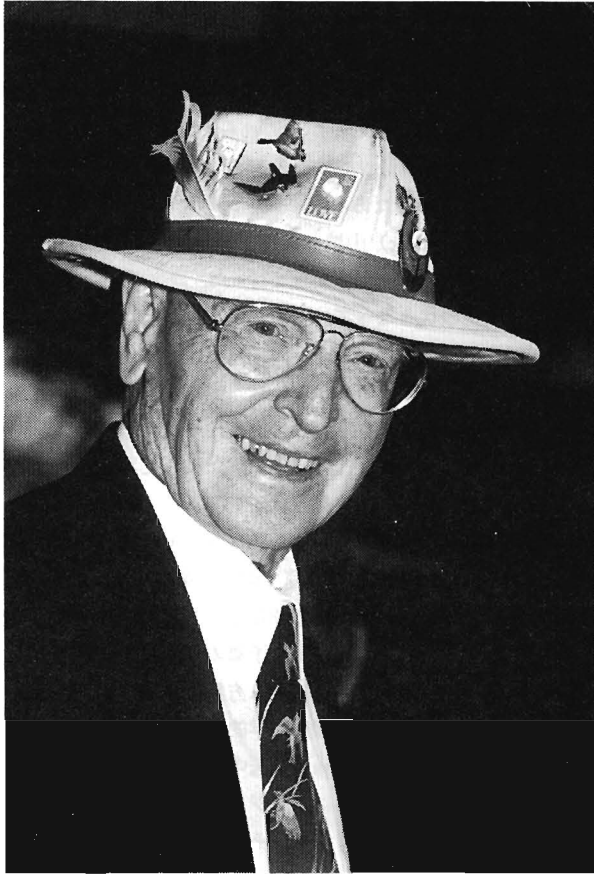


## 紙 碑



故 H. マックルア博士

アジア地域に初めて広範な鳥類標識調査のネットワークを創設し、この地域における鳥類移動の解明とバンダー育成に大きく貢献された米国鳥学者 H. Elliott McClure 博士が1998年12月27日、ロサンゼルス北郊のカマリロ (Camarillo) で逝去された。享年88歳。

博士は1910年4月29日シカゴ市に生まれ、青少年時代はイリノイ州で過ごし、イリノイ大学を優秀な成績 (ファイ・ベータ・カッパ賞) で卒業、後にアイオワ州立大学に移り、1941年「野生動物管理」に関する研究業績で学位 (Ph. D) を取得した。第2次世界大戦直後カリフォルニア州に発生した馬脳炎の研究に参加したが、その業績を米陸軍のウオーターリー病理研究所が認め、博士を1950年日本に派遣し、在日米軍406総合医学研究所 (406MGL) に所属させた。この研究所は、当時日本に流行していた日本脳炎などの原因となっていた節足動物媒介ウイルスの研究をその重要研究課題として

おり、医学者のほかに昆虫学者、鳥学者などが共同研究に従事していた。そのなかで McClure 博士は、鳥類の生態ならびに鳥類とウイルスとの関係の研究に係わった。約8年間の406MGLにおける博士の精力的研究成果は同研究所の記録として残されたほかに、Wilson Bul., Auk, J. of Wildlife Mangt., Bird Banding, Toriなどの鳥学研究誌をはじめ医学、昆虫学関係など各種学会雑誌に数多く発表された(山階鳥研究所50年のあゆみ 1984 p.11~14参照)。McClure 博士以前に來日、入れ替わりにアメリカに帰国した O. Austin 博士は黒田長久博士らと全国の野性鳥類を調査して、The Birds of Japanその他を発刊したが、これら米人両博士の研究発表は、敗戦の打撃で仮死状態だったわが国の鳥学研究活動にカンフル剤的影響を与えた。

博士は1958年に406MGLの仕事を終えたあと、マレーシア大学に移り、教鞭をとる傍ら、クアラルンプール郊外のゴンバック(Gombak)山地およびセランゴール(Selangor)河川低地における熱帯ジャングルの調査地で、学生とともに研究調査を行った。ゴンバックの調査地点は、地上120フィート以上の高木樹冠に葉が密生し屋根状となっている密林にあり、鳥類の多くはその樹冠部を移動して生活するので、地上からの観察は極めて困難であった。博士は大木の樹冠部に粗末な観察足場を設置し、昇り下り用には樹幹に長い梯子をいくつも括りつけた。その半端でない高さ、時おり毒蛇も出現するこの梯子に、大抵の学生や見学者は昇るたびに肝を冷やした。博士は予算不足の中で作ったこの一見危険な「観察やぐら」をギボンのような習熟と自信に満ちた身軽さで昇降するのが常だった。実践優先主義の博士の研究態度がここで鮮明に見られる。

わが国にける鳥類標識調査は、戦前国際的に見てもかなりの実績を残したが、終戦前後の混乱時には空白状態を呈した。1960年に山階博士の提唱で東京で開催の第12回国際鳥類保護会議世界大会で採択された決議事項に対応し、農林省は1961年から1963年まで3年間、試験的鳥類標識調査を山階鳥類研究所に委託実施した。しかし、同省はその後の調査予算の打ち切りを鳥類研究所に通告してきた。研究所は標識調査の重要性に鑑み、自己予算で継続する方針を立てたが、資金問題の解決に苦慮した。この頃、米国国防省所轄の病理学研究所は、地理病理学的調査に関連してアジア地域の渡り鳥資料収集を企図した。そしてバーンズ(C. M. Barnes)獣医中佐を通じ、山階研究所に情報の収集供与を要請して來た。研究所は、この目的達成のためにはアジア地域に鳥類標識調査のネットワークを創設して調査を実施することが不可欠であること、さらにそのコーディネーターとして McClure 博士が適任であることを助言した。この助言に従って、同中佐は病理学研究所本部から上述ネットワーク設立の許可を得、マレーシア大学にいた McClure 博士を日本に呼び、アジア地域鳥類標識調査ネットワークの構築に着手し、この組織をMigratory Animal Pathological Survey (MAPS)と名づけて活動を開始した。バーンズ中佐の強力な後援の下に、McClure 博士は精力的にアジア各国の研究機関を訪問し、研究協力を呼びかけた。これに応じてMAPSにはフィリピンの国立博物館およびシリマン大学、韓国の慶熙大学、台湾の東海大学、香港 Bird Watching Society、マレー大学、タイ所在 SEATO 医学研究所、日本の琉球大学および山階鳥類研究所などが調査参加の協約を結び、アジア地域で前代未聞の大規模渡り鳥調査ネットワークが誕生した。McClure 博士指導のMAPSの調査は、約7年で終了したが、その業績は総括報告「H. Elliott McClure 1974. Migration and Survival of the Birds of Asia」として発表された。McClure 博士のMAPSにおける大きな業績は、この報告書と英国鳥学会誌 Ibis、日本鳥類標識協会ニュースなどに掲載の書評を読めば一応理解できるが、筆者がここで特に述べたいのは、博士指導によるMAPSの援助が無かったら現在アジアで指導的位置にあるわが国の鳥類標識調査は有り得なかったであろうと云うことで、どんなに感謝申し上げても足りない思いである。

さらにまた、博士は鳥類の保護、国際交流、研究者育成面でも大変熱心に努められた。例えば、噴火の恐れがあり上陸調査が困難な鳥島のアホウドリについては、硫黄島基地の鳥類とウイルスの調査に日本研究者を派遣するという名目で米空軍に要請し、山階博士その他の日本人研究者の軍用機便乗を可能にした上、鳥島上空では観測を容易にするため超低空旋回飛行や乗降口のドアの取外しをパイロットに頼むなど懇篤な配慮をなされた。豊岡のコウノトリの安全捕獲作戦の際には、日本側の要請を受けた博士が米陸軍に頼んでキャノンネット装置とロールストン軍曹という専門家を派遣してもらい、作戦を成功させた。以上はごく一部で、アジア各国でバンディングや保護活動の振興のため国際的リーダー会議を主催したり、後援をなさったりして、その功績を枚挙すれば限りがない。博士は逝去の直前まで鳥類標識や保護活動の指導に努められ、その尊い一生を全うされた。謹んでご冥福をお祈りしたい。

1999年1月31日

日本鳥類標識協会

吉 井 正